

平成24年度第2回高知県産業教育審議会

日時 平成24年9月6日(木) 13:30~16:30

会場 高知農業高校 会議室

出席者 審議会委員(8名)

次長(中山)、課長(藤中)、企画監(森本)、課長補佐(小野)、
課長補佐(竹村)、学校教育企画担当チーフ(高野)、再編振興室チーフ(竹崎)、
定通産業教育チーフ(北村)、

指導主事(農業・水産担当、工業・情報担当、家庭・看護・福祉担当、商業担当、再編
振興担当2名)

高知農業高等学校(沖上校長、松下教頭、谷口教頭)

1 開会

(1) 教育委員会挨拶

(2) 審議会委員紹介

(3) 事務局紹介

2 学校視察・説明

(1) 学校視察(授業及び施設)

(2) 学校説明(沖上校長より説明)

【配付資料】

①次第

②座席表

③資料1 専門学科の課題と今後の在り方

④資料2 平成24年度第1回産業教育審議会の概要

⑤資料3 県立高等学校再編振興検討委員会及び作業部会の意見等について

⑥参考資料 進路状況他

3 議事

(1) 平成24年度第1回産業教育審議会概要説明

(2) 県立高等学校再編振興検討委員会に関する報告

(3) 高等学校の再編振興における産業系専門学科の在り方

【協 議】

会長 : それでは学科ごとに、議論していただきたいと思います。工業、製造業の場合は、
どんな人材が必要かということのはっきりしている。ところが農業、水産の場合は難
しい。まずは、農業について率直なご意見をいただきたい。

山崎(道)委員 : 沖上校長先生、オーガニック、有機農法に関した一貫した技術者養成については、
カリキュラムの中にあるのか。

沖上校長 : 循環型農業ということで安芸、芸西あたりでは天敵農法に取り組んでいる。これに
ついては本校でも取り組んでおり、農業クラブでも四国大会で取組を発表している。
先端をいけるような農業高校でないといけない。最先端分野においても、学校も独自
の取組をしなくてはならない。

山崎(道)委員 : 有機農法でできた、まともなものなら通常の3倍から5倍で売れる。その方向を伸
ばしてほしい。加工食品おいて、今後芽がでるところにも注目してほしい。

沖上校長 : 昔は、各農家で豚とか牛を飼っていた。こういうスタイルにいずれはもどるべきで

はないか。オーガニックのような付加価値をつけて販売し、小さい規模でも十分採算が合うような方法もある。生産者にお金はいってくるシステムを考えないと農家は損して、経営に甘い部分がある。

宮内委員 : 単なる生産にとどまらず、生産から販売までを見通し、利益をあげる農業経営を考えていなくてはならない。

会 長 : では、どのような教育をしたらよいか。

宮内委員 : 投資対効果を考え、投資と経営内容と販売の見通しを考えさせなければならない。

沖上校長 : いずれ、山や木において国産材が必要な時がくる。山から木を切って運んでくる、材を運搬する人材をつくっておく必要がある。本校の森林総合科は人気がないが、現場の第一線で活躍できる人材を育成している。しかし、これでは食べていけないので材を有効活用し製品を作っているが建材として販売できる手立てを考えていく必要がある。これにそなえた教育も本校でやっているが、現在の問題は林道整備である。

宮内委員 : 林業が今難しい。過去に国の補助をうけて植林し、投資をしてきたものが赤字である。職業として成り立たない。例えばチップをつくっても仕事として成り立たない。林業の教え方をどのように照準をあてるかが難しい。今の林業情勢を考え、どこにポイントを絞って教えるかが大事である。将来求められる時期がくるであろうということは希望的観測である。

会 長 : 行政が動かないと、教育だけでは難しい。

会 長 : 違った観点からご意見はないか。

会 長 : 最後までやろうとすると、全国の消費者との勝負がある。本当に飯を食えるようにするためにどうすればよいか。この学校のように、良い教育をおこなっていることが生きるように、何か考えなくてはいけない。

山崎（隆）委員 : 今日の沖上校長先生の話の中で、生命の大切さを基本にした人間作りが充実していることに快く感じている。うちの事業所にも、農業高校から福祉関係の仕事に2名就いてもらっている。非常に人間的な面がある。いろんなことを体験しているので感性が豊かである。また、掃除をするなど体を動かすことを積極的にやっている。

農業高校は大きな役割を果たしている。今日、生徒を見ても、皆さんも評価が高いと思う。

例えば、介護職員の給与は安い。夢がもちづらい給与であり高知県から人材が流出しやすい。何を大事にしなければいけないかわかっているが、このような現実を考えるとなかなか難しい。しかし、解決困難な問題に取り組んでいく必要もあるのが教育である。

また、行政の支援が必要である。福祉では高齢者が増えていく平成37年までは成長産業である。しかしながら、それ以降は急に減っていく。この頃には、事業所も減る。このようなことも考える必要がある。農業でおこなわれている教育がすぐに専門としていかせるわけではないが、教育によって培われてきたものはどの職業についても強く生きていることを確信している。どう積み上げていくのか、さらにこのようなことを感じてくれる人をどのように増やしていくのか。

会 長 : 他にご意見はないか。

東委員 : 高校3年間で専門力を身につけることは難しい。人として基本的で一番大事なところに触れることができる教育をされていると感動した。専門高校でも、即、就農や収入に結びつけることは、3年間では難しい。産業系の高校は特にいろんな体験ができる。人としての基本となるキャリア教育は、今後も大事である。それぞれの産業系高校で、基本として頑張っていることを大事にしてほしい。

副会長 : 教育方針を聞いて感動した。高校3年間のデリケートな時期を、人間力を高める真の農業人を育てるという教育方針のもとに教育されている。子どもの人生にとって大事なことである。基本的な教育をうけていれば、農業が大事であることは身にしみているはずなので、すぐに就農に結びつかなくても、いつかは農業につながっていくと思う。

教育で重要なのは人間力。おそらく農業の実態は変化していき、こつこつひとりで行っていくのは難しく、連携が必要となる分野となる。連携できる人材を育てることが大切。

会長 : 今日の見学で、人間の基礎力を高める教育がおこなわれている。成績だけではだめ。生徒の態度を見れば分かる。採用側から見てどうか。

山崎(道)委員 : 田舎の子は、自然に触れて様々な経験をしている。4、5年経つとリーダーになる。いろんな体験が生きてくる。このような教育は、確かに効果はある。

会長 : それでは、水産についてご意見があれば伺います。今日の水産の難しいところは、どのへんか。

北村チーフ : いかに水産関係に就職させるか、人材育成と雇用をどのように繋げていくのかが大きい問題である。

山崎(道)委員 : 養殖という分野では、高知県では系統性や計画性がないため損をしている。水産の就職先は正直言ってない。悪い状態であるということスタートとして考えなければならない。

宮内委員 : 小中学生が水産をイメージできないとか、水産の専門知識を学んでも職業に結びつかないという現状をどうするか、考える必要がある。

山崎(道)委員 : 水産の就職先は、高校生にとってもものすごく厳しい。

宮内委員 : 愛媛のような水産関係の会社が求める生徒をつくっていく必要がある。

会長 : 実際、どのくらいの生徒が就職しているのか。

北村チーフ : 海洋学科で卒業生35名、その内県内就職希望が15名、内定者が12名である。なかなか海洋関係の就職先は少ない。海洋高校では3つのコースと、専攻科を設置し学習している。

会長 : どのコースをメインにしているのか。

高等学校課長 : 食品コースでは大学や食品製造、機関では工業高校の機械系のような就職先や船舶の機関関係の資格をとって進み、航海コースでは航海士養成の方向で教育している。しっかりと勉強したい生徒は専攻科に進み、海技士として活躍する。求人はあり、即戦力として期待されている。しかし、食品コースがどうしても方向がしばれていない。大学進学では全国的にも栽培、食品関係が多い。全国的にも人気がある。

山崎(道)委員 : 海洋高校でもこの学校と同じように、生徒は良い仕上がり方をするのはないか。

高等学校課長 : 中学生、保護者にとって水産というイメージがわからない。キャリアプランをイメージできるようなものを発信していく必要がある。

会 長 : 希望しても就職がなかったら意味がないような気がするが。

山崎(道)委員 : それは認めて、せっかく海の側で自然にふれ、愛される子を育てたらどうか。

会 長 : 人間力が高い生徒が育ったらいいということか。

山崎(道)委員 : 水産試験場も近く、生き物、自然科学も学習できる。今の世の中に見合うと思う。

会 長 : 農業と同じように、加工に工夫があれば利益がでるのか。

山崎(道)委員 : 愛媛でも加工食品は魚を単に売るより、何十倍も売り上げがでる。海洋高校も熱心にやるべきである。

副会長 : いろいろなものを作っているようだが、これをしてはいけないとか販売をしてはいけないという制限はあるのか。

沖上校長 : 委員会からは、推奨されている。2,900万円の歳出があり、2,600万円の歳入がある。

副会長 : いかに、生徒も楽しいと感じられることをやるかが大事である。今は、加工食品は突然人気ができることがある。こういうことを経験させたい。

宮内委員 : 食品をつくる時の保健所とのかかわりは、社会に出たら避けることはできない。こういうことを経験させることが大事。

会 長 : 課題研究は生徒から自発的におこなうのか。教員が仕掛けるのか。

沖上校長 : アイディアは生徒がだして、自主的にやっていく。

副会長 : 水産高校でもいい商品をたくさん持っている。もっと全面的に打ち出せば、良いイメージにつながる。

近藤委員 : 3年間、有意義な生活を送ったからこそ、未来に巣立つ時就職先がないのはつらい。進路指導で一人でもこぼれることがないようにできればいいし、行政等のバックアップもないと、折角育てても逆効果であると不安に思う。卒業後、就職できるような進路指導を行ってもらいたい。

会 長 : 農業高校では最近女子生徒が増えているようだが、どのような状況か。

沖上校長 : 生活総合科はもともと多く、畜産総合科、食品ビジネス科は女子生徒が多くなっている。愛玩動物に関する教育も多いからではないか。女子生徒は優秀である。

会 長 : 不本意入学が過去にあったと聞いているが、どうか。

沖上校長 : 過去にはミスマッチがあった。オープンスクールの実施によって、学科の実情が分かったうえで入学してくる。今年度のオープンスクールの参加者は、昨年より60人増え、390人でした。

藤田委員 : 農家の子女の方は、何パーセントか。

沖上校長 : 本年度は19.6%である。かつて25%という時期もあった。

藤田委員 : 農家の子どもさんが20%弱ということであるが、必ずしも家業を継ぐためにこの学校にきているわけではないと思う。農業や水産等、産業高校で悩んでいることは、将来の職業に直結していないということだが、若いうちはイメージしにくい。すぐに職業につくというイメージはできない。農業法人を設立する等、産業界や行政のバックアップがあり、今学んでいることが生かせればと思う。

北村チーフ : 資料3の再編振興検討委員会 産業系専門学科の配置等に関して、ご意見をお聞きしたい。

山崎(道)委員 : すべての家庭では多大な出費をして子どもを育てている。その分、手厚く教育してもらいたい。十分教育ができる形をゆずらないでほしい。予算を削ったら喜ばれるかもしれないが、県民の出費のバランスを考えてほしい。

会 長 : 寮に入れて子どもを教育する効果はあるか。

沖上校長 : 規律正しい教育ができる。寮は教育の生命線ではあるが、クラブ活動による成果が大きい。

近藤委員 : 私は県外からきているが、高知は良い所がいっぱいある。農業、水産でも銘打っていける県である。県外から高校に生徒を呼べるような策はないか。まだ伸びる可能性はある。

沖上校長 : 教育の日について思うことだが、高知の強みは第1次産業である。高知県らしい教育の日にするために、小学生から高校生まで、体験活動をさせたい。中学生では農業水産に関する悪いイメージをもつ。小学生の頃からすばらしさを体験させたい。ぜひ教育委員会でも体験発表会ではなく本当に高知らしい教育の日をつくってもらいたい。農業、水産そして高知県の素晴らしさを実感できる。将来の進路にもつながってくる。

会 長 : 小学校からということは、今までも議論がおこなわれてきた。体験することは人間力を高める教育である。

山崎(道)委員 : 沖上校長の案を、この審議会の意見にしてはどうか。